の　地　図

石原慎太郎

中央公論社

1958年12月15日発行
海　の　地　図
著者　石原慎太郎　発行者　栗本和夫　発行所　中央公論社
東京都中央区京橋２-１　振替東京34　検印廃止　定価 280円
共同印刷・協和製本

「海図よ
汝に記せし
わが情熱の航跡
悩みの海溝――」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

戻って来て見ると海もすっかり様子が変っていた。
といって、右手の岬の端に立てられた赤と白の縞模様の風見の旗も見えるし、入り江左手の渚のウィークエンドハウスのテラスには、夏中と同じように白いデッキチェアが置かれてある。
が、なにより水の色が違っている。台風が一、二度過ぎただけで、海の色がどうしてこうも急に深く澄み切ってしまうのか晶子(あきこ)は知らない。がともかくテラスから見下した、傾いた日に翳って幾分暗い入り江の水も、この季節になってようやくむせっぽい乱反射を忘れ、蘇ったように青々と輝く岬の背の木立の向うに拡がる外海にも、晶子が先日来下界と比べて一足早い初秋の高原の大気に感じて来た、あの冷えびえと、遠くきりなく澄み切った静けさがあった。
陽射しは未だ強く、啓介は岬の風見と同じ赤白だんだらの陽よけをテラスに張り出した。晶子は陽よけの作った影を外して、体を手すりに寄せ、真向かいに日を浴びて見た。陽射しは強くはあったが、夏中のように肌にまつわりつく重苦しさの代りに、肌にとまらずにすぎる爽やかな軽さがある。呼吸

出来るような光の香りがあった。
入り江を行き来する小船は、夏間はヨットやけたたましいモーターボートにまぎれて目立たなかった、入り込んだ入り江の奥にある小さな漁村の漁船である。あちこちで真直ぐ立ち昇る煙は集められた海草を焼く煙であろうか。煙は立ち昇ったまま真青な大空に薄れて消えてしまう。日が暮れればそれは大方濃い夕靄となって再び地上に下りてくることだろう。
テラスの籐椅子に身を延べながら晶子は啓介の作ったトムコリンズのグラスを、唇を当てず眼の高さへかかげたまま中の氷を溶かすようにして廻していた。酒落た切り子のグラスの中の琥珀の酒が固く涼し気な音をたててゆれ、グラスを透けて通った海と空と、木立の色が切り子の縁へ無数に散らばって映る。
晶子には氷のたてるその音が心持ち良かった。軽く、固く、涼やかなその音は彼女をふとしみじみと落ちついた幸福感にひたらせるような気がする。
がそれも長くは続きはしない。
「氷がとけて酒が薄くなるぜ」
啓介が言う。
黙ってて、と言う代りに、
「氷をちょうだい、もっと」
啓介は肩をすくめ、言われた通り一つつまんで差し出した晶子のグラスに落すように入れると、氷壺を下げたままテラスに出て手すりへもたれた。何故か軽い舌打ちで、

「ちえっ、やっぱり、もう秋だ」
区切るように言った。
入れた氷がグラスの中で動くのを見つめながら、晶子はそれを聞いていた。何故彼がちえっと言うのか、それが訳としてではなしに彼女へ伝わって来る。
「赤とんぼだ」
言った啓介の手に追われて迷い込んだのか、赤いとんぼが一匹、ついと晶子のかかげたグラスの前をよぎって陽よけの外に抜ける。半透明の薄い羽根が陽を浴びてきらっと光った。
一瞬晶子はつき戻されたように自分が過して来たこの夏を想った。
それは幾つかの想い出、確かにそれは楽しかったが、それらを積み重ねた楽しい追想としてではなしに、何故か意味の知れぬもの足りなさを、突然彼女の胸の内に引き起した。
大島行きのヨットの外洋レース、霧ヶ峯のグライダー。高原の上空三百米、あれで海抜何千米あったろうか、そんな上空で啓介は身を乗り出し、後の座席にいる晶子に接吻した。交わされた上気した頬と頬の間を吹き抜ける風の冷たかったこと。あの接吻は素晴しかった。
〝確かに。が、私は今、退屈だ。急に、やたらにもの恋しいほど、退屈なんだ〟
何故かふと、が、はっきり晶子はそう感じていた。
部屋にそなえてある小さなジュークボックスに啓介がスウィッチを入れた。機械狂いの彼の弟が、普通のプレイヤーに倦きたらずに、外国から部品を取り寄せて組みたてた、贅沢な品だ。がこの重々しい機械は、簡易で明るいこのビーチハウスにはそぐわないと晶子は思う。

それは、そう、大袈裟な音の罐づめに見えた。
レコードはあの曲だった。折ある毎、晶子を抱いて踊りながら啓介はステージのバンドマンにこの曲を頼んだり、彼女の前で自らレコードをかけたりした。
ある時、この曲は確かに晶子にとって音楽的効果となったとも思う。
が、今、晶子はそれを聞きながら何ともない軽い反撥を感じる。
啓介は振り返った晶子にうなずいて見せた。何故か尙更晶子はそう感じたのだ。
〃私は彼に倦きたのだろうか〃
思って晶子は少し慌てた。と言ってそんな自分を責めるなにものもありはしない。
〃今までの他のお友達と同じように――？　そんなことはない。私は初めてこの男に愛していると言った〃
言い訳するように晶子は思った。
〃だけど、愛すると言うこと、一体それは、本当にどういうことなのだろうか〃
晶子は自分を抱きすくめた男たちの腕、押し当てられた唇、覆ってくる激しい、或いは細い吐息、それらのいくつかの感触を想い出すことが出来る。
それらの内で今まで晶子は、啓介のそれを最も好ましいと思う。と言って、そうした愛撫の感触がどれ程皆違っていただろうか。愛するなどということは、結局それらの比較の上にしかあり得ないのだろう。
そうやって晶子の選択は段々正しくなって来た筈ではないか。

とにかく、啓介は晶子にとって魅力的ではあった。他と比べて最も。
精悍と言うよりは、いささか粗野にさえ見える顔だちの彼は、それに似つかわしい見事な肉体を持っている。何でも屋の彼が数多くのスポーツで造った端正な弾みのある肉体。それは殆ど美しくもある。そしてその美しさの内に晶子はある充足を感じるのだ。晶子は彼の見事な肉体の筋肉の一つだけを愛することが出来る。
フットボールのルーズスクラムで転倒して裂いた傷痕のある彼の上膊筋だけを、晶子は殆ど一個の人格のように愛することが出来るのだ。力の入る度、古いくすんだ傷を浮き出させるその筋肉は、彼女が周囲に見ることの多い、青白いやたらに思索的な青年たちの誰よりも卒直に青春というものを語っているように思えた。
啓介の陽焼けして年中浅黒い肌は、たとい雨の日暗い室内で話し合っていても、その健康な肌を照らしつけた強い陽の光を想い起させる。
それでいて彼は外見に似ずきめの細かい頭をもっている。とは言え、晶子には余り好ましくないタイプの、体を動かさずに自分の青春にことさら意味をもたせたり、自分でこしらえた深刻な畏に自らをおとしてこずきまわしながら、やたら悲劇的絶望的な青年たちのそれとは違って、彼は自分の生活に実感的につながりのないことがらに対しては恐しく淡白でもあった。
彼がふとした折晶子をかばったりいたわったりする心づかいや仕草の内には、四十男のような枯れた繊細さと、同時にちょっと押しつけがましい一人よがりがある。が殆どの場合、晶子は彼のそうした性情の内にある安心感を感じるのだ。

彼が晶子に「愛している」と言った時、彼女は今までのように妙な迷いを感じることがなかった。彼の言い方には、改めての告白と言った感じよりも、とっくに起きてしまっていることを互いに改めて気づき直して見ると言った、誘いがあった。晶子は安心してその誘いにのり、「私もよ」と答えたのだ。晶子は暫くして自分が男に向ってその時初めてそんな言葉を使ったことに気づいたが、それについて決して慌てることはなかった。

当初、晶子の友人たちが同じ啓介に魅かれているのを見て、晶子は秘かに自らの選択に躊躇を感じた。彼女には自分の選択や思考が通俗に堕するのが何よりも気に入らなかったから。

が啓介は向うから晶子を認め、他の晶子の友人たちを相手にしなかった。そんな彼に、晶子はようやく自分を許したのだ。

と言っても、彼女は啓介を独り占めにしようとは決して思いはしない。彼が他の女友達に自分と同じように関心を持つというのは、余り愉快なことではなかったろうが、何故か晶子には、相手を常にそうしたことで束縛する理由を自らの内に見出すことが出来ない。

ということは、立ち場を逆にした時、晶子が自分についても同じことを無意識に感じているせいであったかも知れぬ。

がともかく、啓介は他と比べ晶子にとって最も魅力ある青年に違いなかったし、二人は互いに、そう、愛し合ってもいたのだ。

ジュークボックスのレコードは鳴りつづけていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

二度目のサビに入る前、オーケストラのアルトサクスがソロで感傷的に旋律を演奏している。啓介はハミングでレコードに合わせながら、踊ろうかと言うように彼女へ向って手を差し出した。晶子は坐ったまま頭を振った。

女の声がまた唄い出した。彼女は何故かいらいらしたものを感じて来た。テラスから眺めた、ぬけるように高く遠い輝いた空、青くきりなく澄んだ海、そうしたものにこの唄は何故か釣合わなかった。そしてそのレコードで蘇って来る二人の想い出も。彼女は眼に映っている海と空のすがすがしく、遠い果しなさに自分が今取り残されているように思われてならない。

啓介がこのレコードに晶子以上に、二人の仲の想い出を結んで満足しているということに、彼女はちょっとの間自分でも訳のわからぬやり切れなさを感じる。

レコードが終ると彼はきっと言うだろう。

「君、覚えてるだろう、ね――」

とか、

「良かったなあ、あの晩――」

とか、

そう、それは確かに素晴しく、楽しかった。

〝が、私は今何かがもの足りない。そんな想い出も何故だか私には退屈でしかない〟

が、また晶子は思った。

〝私はきっと随分贅沢なんだ。私は今十分幸せな筈ではないか〟

お友だちに語って聞かせ、彼女たちが十分うらやんでくれる夏休みの想い出も沢山あった——。
そして残された夏休みの最後を過すためにやって来た、もう人気のないこの入り江のビーチハウスで、私たちはきっと牧歌的な数日を過すだろう。
陽の当ったテラス、色の変った深い海、音楽、一杯のトムコリンズ。そして、今、訳の知れぬ何かへの物足りなさ。
この気持はちょっとした贅沢(ルックス)だと彼女は思う。するとその物足りなさに一瞬彼女は満足を感じた。
〝私は贅沢が好きだ。私はそんな女だ〟

「おい、ひと泳ぎしにいかないか。船を出すぜ」
知らぬ間に水着に着替え啓介が立っていた。ボタンをかけずに羽織っただけのシャツの下に、広い肩と厚い胸、そして太い腕がある。肩の幅に似ず細く形よくくびれた腰に海水パンツがきっちりと食い込んでいる。
晶子はちょっとの間それらをやましいような眼差しで見つめていた。
「貴方一人で行ってらっしゃい。汽車で疲れたの、私ここから見ているわ」
「じゃ」と言ったきり無理に誘わず啓介は出て行く。
暫くしてテラスの下から爆音をたててランナーボートが走り出して行く。手馴れた銛を晶子に向って振っている啓介が見える。
晶子は手を振って応えた。一体何処まで行くのか、船はすぐ岬の端を廻って見えなくなり、爆音だ

けが耳に残った。
晶子は思い出した。二週間前、あの岬の向う側の岩場で、啓介は二尺近い大きなカサゴを突き損った。下から浮き上るなり青ざめた顔で彼は晶子に向って叫んだ。
「化け物だ。二尺近いカサゴだ。銛を打ったがはね返しやがった」
言ってもう一度潜ったが魚はもう見つからなかったのだ。
彼のその夜の口惜しがりようといったらなかった。魚のことで誰かに冷かされると、話が嘘ではないということを彼はムキになって説明しにかかった。以来彼は毎日一度はその魚を張りに岩場へ出かけて行ったが、結果はいつも同じでしかなかったのだ。そして今日もまたきっと。

が、晶子にはたった一匹の獲物にそこまでムキになれる啓介が好ましく思えた。少くともそれは、人間らしい、男らしいことだ。彼の稚気を嘲笑いながら、五米の水潜りも出来ない青年たちを晶子は十分軽蔑することが出来る。
岬を廻った船の爆音が消え、辺りはもとの静寂に戻る。
取り残された彼女にまたあの贅沢なもの足りなさが蘇って来る。彼女は嚙みしめるようにそれを味わった。
晶子の身の内に、外の遠い何処かへ飛翔しようとする何かがある。がそれは、明るく透き通った海と空の輝きの前に、気だるい焦燥となって胸の内にくすぼるだけだった。
〝私は健康だ、私は若い。そして贅沢だ。が、私には、自分でわからぬ、何かが足りていない——〟

晶子は立ち上りグラスに新しく酒を注いだ。そして氷を三つ。アルコールがとりわけ好きという訳ではなかったが、この色と高い香りに晶子は魅かれる。スコッチの、或いはブランディの爽かに突き抜けるような、高価な香水のように妥協のないその香りを晶子は愛した。

注いだグラスを手にしたまま、することもなく晶子は部屋中をゆっくり歩いた。一人でいることを彼女は決して嫌いではなかったが、何故かその時そこに一人きりでいることに晶子は軽い苛立たしさを感じる。といって、他に誰が来てくれてもそれがどう変るという心の当てもなかった。きっと夏を通しての遊びの疲れがやっと出て来たのだ、と彼女は思うことにした。そうでなければこの物足りなさは一体何だというのだろう。

或いはそれが若さということなのだろうか。ちょうど何もかにもに行きづまってしまったような時、急に理由もなく感じられるあのやけのような陽気な気持と同じように。

何とはなしスウィッチを入れると、仕掛けてあったジュークボックスはすぐ音をたてた。低い男の声が、今晶子のいる九月の歌を感傷的に唱いだす。男はため息でもつくように、過ぎていった月日と、これからやってくる月の暦の名を数えて唄っていた。

晶子は急に、今まで努めて想って見なかったこの数日後に始まる学校での生活を想い出した。

頁を開いたきり幾日も机の上に放り出され、そのまま他のノートや本の下に埋もれて行方の知れなくなる経済学のハンドブック。低い貧乏臭い声で古いノートを読み上げるだけの中年の助教授の講義。書いた内容について当人が最も無関心な試験の答案。寮で、夕食の後のお饒舌。それらの繰り返しの内には、何時の間にか晶子が同化され、飼い馴らされた目に見えぬ何かのシステムがある。それは怖

しく退屈であり、退屈というより彼女にはすべてが偽瞞に思われた。
〝が何故、私はそんな中にいるのだろうか〟
と今さらのように彼女は思う。
とにかく、夏休みは後四日しか残っていないのだ。
そしてまた、突然彼女は思った。
〝私は本当に若いのだろうか〟と。

晶子は歩いていってレコードのスウィッチを切った。
陽はだいぶ傾き、岬の木立の影がテラスに近づいて来る。梢の切れ目からもれた光が陽よけをくぐって部屋の奥を照らし、壁掛けの皿に反射して綺麗だった。
晶子は二杯目のグラスを空けてしまった。酔いが少しずつ体に廻って来る。酔いというより、それはただ気持の高ぶりだった。そしてその気持が一体何であるか定かならぬながら、晶子は先刻のあの物足りなさの代りに自分が急に情熱的になっているのを感じていた。情熱というより、それは殆ど自らも意外なほど情欲的な感興だった。晶子はふと今ごろ水を潜っている啓介の体を想った。そんな自分が急に気恥しく、彼女は思った。
〝ようするに、夏休みは後四日なのだ。その四日間を充実して過すこと。私はそれだけに心がければ良い〟
レコードをけした後の静寂には啓介のモーターボートの爆音も聞えて来ない。彼が未だ帰って来る

様子はなかった。
〝充実した最後の夏休みを過すこと――〟
空になったグラスを置き、晶子はソファへ横になり眼をつむった。

晶子はシャワーの音で眼をさました。思わず、
「どなた」
かけた声へ、
「俺だよ」
啓介が答えた。
「ちっとも気がつかなかったわ。モーターボートは」
「弟の奴が使いっぱなしで帰ったらしく、帰りにガソリンが切れてパドルで漕いで来たんだ。寝てるからそっとしといた」
「そう」
晶子は体を起した。酔いが未だ残っている。晶子は先刻の気持が、一度睡った後もそのまま続いているのを感じ、ふとまた気恥しくなった。
「もっと寝てたらいいじゃないか」
「いいの、それより獲物はあって」
「ああ、ベラと石鯛を二匹ずつ。晩には料理して食えるぜ。いいなあ、今頃の海は澄んでて、もうち

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook